

# 「知識青年」研究における「知青書簡」に関する再考

－「知識青年」の個人史・生活史研究をめぐって－

遊 又

はじめに

・「知識青年」<sup>1</sup>の研究の経緯

「知識青年」の研究では、「知青」にはおおよそ広義と狭義の2つの定義が存在している。広義には、1953年以降進学できず、国の呼びかけに応じて「下郷」<sup>2</sup>したすべての青年を指す<sup>3</sup>。狭義には、特に1962年以降に国が「上山下郷」の都市青年学生に安置経費を支給し始めた後、「下郷」したの都市部の中、高校卒業生を指す<sup>4</sup>。

一部の学者は、1955年秋、毛沢東の「農村は広潤な天地だ。あそこで大いに活躍できる」<sup>5</sup>という「最高指示」を「社会主義時代における都市部の知識青年たちを農村へ動員させる金科玉条」<sup>6</sup>と認定した。多くの都市の青年が毛沢東の呼びかけに応じて農村に赴くにつれて、「上山下郷」は高潮に入り始めた。そして、この社会運動は「文革」が終わってから3年、1979年に雲南省の「知青大返城運動」<sup>7</sup>の勃発のために終了した。

しかし、「知識青年」や「上山下郷」に対する特定研究は相対的に遅れている。

---

1 知識青年（ちしきせいねん）、略して知青（ちせい、知青）。

2 上山下郷運動（じょうさんかきょううんどう）、略して下郷、下放（かきょう、かほう）。

3 定宜荘「中国知青史：初瀾（1953 - 1968）」北京：当代中国出版社、2008年、前頁。

4 同前。

5 本文の原題は『鄱県大李荘郷の協力化計画の経験』、中国共産党河南省許昌地委農村工作部が書いたもので、中国共産党河南省許昌地委農村工作部が1955年9月4日に編纂した『互助協力（互助合作）』第15期に掲載されている。その後、『中国農村の社会主義高潮』に編入された時、毛沢東はテーマを『ある郷で協力化計画を行った経験』に変更した。——『毛沢東文集』第6巻、人民出版社、1999年。

6 大野旭「広潤天地へ飛ばされた知識青年たち－中国・文化大革命期における人的流動と社会主義権力の表象」『中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策』の成果と課題』2010年、ページ89 - 96。

7 「知青大返城」とは、文革が終わった後、雲南生産建設兵団の「知識青年」が請願、ストライキ、断食などの抗争を通じて強く帰城を求めた活動を指す。

中国に比べて、欧米の学者はもっと早くこの実験的な社会運動に目を向けていたようだ<sup>8</sup>。

米国の学者、中国の政治経済と共産主義制度の専門家の Thomas P. Bernstein によって、「知識青年」たちが農村に行き、そして「上山下郷」運動が現れた根本的な原因は、当時（50年代）中国の都市が直面していた就職圧力を解決するため、あるいは経済の問題だと考えられる<sup>9</sup>。しかし、Bernstein 氏の観点については、フランスの学者 Michel Bonnin（中国語名：潘鳴嘯）は異なる見方をしている。彼は「上山下郷」運動の根本的な原因は経済ではなく、政治であり、ソ連への学習と、毛沢東が信頼できる革命の後継者を育成するためにこの運動を発動したと指摘した<sup>10</sup>。Bonnin 氏は1973年に一人で香港に行き、そこで70年代に大陸から香港に逃れた「知識青年」に会ってインタビューを行った。これも「知識青年」の実像が初めて学者の視野に現れたわけであるかもしれない。

復旦大学歴史学教授の金光耀氏により、中国における「知識青年」集団への関心は1970年代末の「知青文学」から始まった<sup>11</sup>。盧新華氏の小説「傷痕」は1978年8月11日に「文匯報」に掲載され、後に「中国現代文学作品選」第1巻に選ばれたため、「知青文学」の最初は「傷痕文学」とも呼ばれた。同時に、「上山下郷運動」や「知識青年」を題材にした文学ブームも始まった。この時期の文学作品は、「上山下郷運動」への反省や批判が緩やかに展開され始めたが、このような探求的な批判は多くの観点で収束している<sup>12</sup>。ある学者は80年代に活躍した「知青作家」の多くは農村に下放し、政府の掲げる共産主義の欺瞞性に疑問を抱くようになったことから、国家や社会に対する批判断識が強い世代だと言われる<sup>13</sup>。

90年代初期、「知青文学」のブームが減退した後、金光耀氏自身を含め、かつて「知識青年」であった一部の歴史や社会科学分野に従事している学者が「知識

8 邱新陸『『知識青年上山下郷』研究総説』『現代中国研究 (Modern Chinese Studies)』、2003年第4期。

9 Thomas P. Bernstein, *Up to the Mountains and Down to the Villages — The Transfer of Youth from Urban to Rural China*, New Haven and London: Yale University Press, 1977.

10 Michel Bonnin, 欧陽因訳『失われた世代：中国の「上山下郷」運動 (1968-1980)』中国大百科事典出版社、2010年。

フランス語原著：

Michel Bonnin, *Génération perdue. Le mouvement d'envoi des jeunes instruits à la campagne en Chine, 1968-1980*, Paris, Éditions de l'École des hautes études en sciences sociales, 2004.

Bonnin 氏が1978年に出版した本には、類似の観点が示されている。

Michel Bonnin, Huang He, *Avoir 20 ans en Chine... à la campagne*, Paris : Éditions du Seuil, 1978.

11 金光耀「後知青時代の知青歴史書写」『中共党史研究』2015年第4期、117-121頁。

12 邱新陸『『知識青年上山下郷』研究総説』『現代中国研究 (Modern Chinese Studies)』2003年第4期。

13 松村志乃「王安憶論——『新時期』を生きた『小説家』の精神史として」2013年。

青年」と「上山下郷運動」の研究に目を向け始めた。そして90年代中後期になると「知識青年」の歴史に関する本格的な学術専門書が次々と出現した。例えば、劉小萌、定宜荘著：「中国知青史：初瀾（1953-1968）」「中国知青史：大潮（1966-1980）」などである。こちらの研究は、50年代以来、中国社会の多くの深層の問題と階級間の矛盾を積極的に模索し、為政者への批判もさらに鋭かった。金光耀氏（2015）は、以上2つの段階をそれぞれ「知青歴史」の研究の「文学書写」と「歴史書写」と呼んだ<sup>14</sup>。

## I. 個人史・生活史と「知識青年」の研究における資料

### 1. 知青回顧録の台頭

「知青文学」の登場は「知青」が自分の歴史を語る情熱を奮い立たせた。1990年に出版された東北地方（北大荒）の「知識青年」の集団回顧録『北大荒風雲録』（中国青年出版社、1990年）は「知青回顧録」が台頭し始めたことを示している<sup>15</sup>。90年代末、大量の「知識青年」の退職に伴い、回顧録の創作に詩人、文学者、学者などの有名人のほか、一般の人々、つまりより広範な社会階層の元「知青」が加わってきた。自分の青春を記録する勢いは、「知青回顧録」、「知青写真集」などの形に表象され、1998年の「上山下郷」運動30周年まで一つの高潮を形成した<sup>16</sup>。

一方、1980年代以来、海外史学研究の新理論、新方法の影響を受けて、中国の学者は個人史の研究価値を重視し始めた<sup>17</sup>。これにより、「知青回顧録」の台頭のおかげで、「知青個人史・生活史」という新興課題もますます多くの研究者に重視される。例えば、カナダの学者梁麗芳（2006）は「知識青年」がどのように自分の「上山下郷」の経歴を記述したのかを深く分析し、「知青回顧録」の中の記憶の再構築を検討した<sup>18</sup>。

「知青回顧録」には「学習を捨てて革命を起こした」「故郷を離れて辺境に行った」「農村に残った」など、知青たち自分のかつての選択への反省が含まれている。このような反省は、「極左」時代全体に対してではなく、「知青」が「過去の自分の影を探し、過去の社会的つながりを再構築し、自分の現実的な状況を位置づけ

14 金光耀「後知青時代の知青歴史書写」『中共党史研究』2015年第4期、117-121頁。

15 定宜荘「知青集団編纂回顧録の特徴と発展過程」『中共党史研究』2018年第9期、50-54頁。

16 金光耀「後知青時代の知青歴史書写」『中共党史研究』2015年第4期、117-121頁。

17 戴建兵、張志永「個人生活史：現代中国史研究の重要な成長点」『河北学刊』2015年第35巻第1号、68-72頁。

18 梁麗芳「私的経歴と集団記憶：知青世代の文化ショックと歴史アイロニー」『海南師範学院学報：社会科学版』2006年第4期、20-26頁。

る」<sup>19</sup> ための試みであり、多くの「知青回顧録」の共通テーマでもある。

「文学書写」と「歴史書写」に続いて、金光耀氏は「知青回顧録」や「知青口述史」などの回顧類の文章を「知青歴史」の研究の第3段階である「民間書写」にまとめた。彼は「知青回顧録」には文学創作の性質もあれば、史料価値も含まれており、特に「知青个体」「知青生活」の研究に独特で貴重な資料を提供していると考えている<sup>20</sup>。90年代初期、「知青文学」の高潮が去った後、「知青歴史」の研究と「知青回顧録」の編纂という2つのブームがほぼ同時に現れた<sup>21</sup>。社会問題や国家政策を中心とする歴史研究と異なり、回顧録は個人的な視点で書かれた記述が多い。「知青回顧録」と「知青口述史」などといった「民間書写」は「知青個人史・生活史」の研究を推し進める役割を果たしたといえるだろう。一部の学者はすでに「知青回顧録」を「知青研究」の最初の基礎資料としており、「文革」と「知青世代」を研究する重要な根拠でもあると認識している<sup>22</sup>。

## 2. 史料としての「知青回顧録」の欠陥

しかし、今日に至るまで、「知青個人史」の研究に使用されている主な資料は依然として「知青回顧録」である。その中でいくつかの欠陥がある。まず、回顧録の著者の主観的な感情や創作形式などの要素の影響を受け、研究結果の同質化を招く可能性がある。そして、「知青回顧録」の著者たちは、著者としてよりも、社会運動の経験者としての身分が重要であるだろう。回顧録に記録されている文字は「静的」情報ではなく、「動的」情報と見なすべきだと思う。このような「変動」は環境、時間の違いに伴って発生する。例えば、回顧録（回顧録的な小説を含む）は心理状態の描写や芸術化の処理がより多く含まれていて、強い感情移入が得られるが、回顧録・口述史の「事後追憶」の特徴によって、著者の個人感情の偏向、記憶の誤差、その他の隠情に基づいて、事実とずれた記述が生じやすい。もしかしたら、「知青」が回顧録に何を書いたかを知る以外に、彼らの書く動機・過程・時間などの問題をさらに検討する必要があるだろう。

「知青回顧録」は「知青個人史・生活史」の研究に大量の資料を提供しているが、その欠陥も同様に注目に値する。したかつて、新たな課題として、「知青個人史・生活史」が「知青回顧録」と「知青口述史」だけを研究資料とすると、明らかにこの課題の全面的な深化を支えるには足りない。これにより、研究資料の拡充が

19 張凱、紀元『又説“老三届”・前言（また「老三届」と言う）』北京：中国青年出版社、1997年。

20 金光耀「後知青時代の知青歴史書写」『中共党史研究』2015年第4期、117-121頁。

21 定宜荘「知青集団編纂回顧録の特徴と発展過程」『中共党史研究』2018年第9期、50-54頁。

22 梁麗芳「記憶の上山下郷—知青回顧録の分類、貢献及びその他について」『現代文壇』2008年第1期、25 - 29頁。

必要になる。

### 3. 「知青個人史・生活史」研究資料の選択範囲の拡大

現在、「知識青年」の個人史・生活史研究に最大の困難として、史料の欠乏が多く、研究の推進を阻害している。史料をどのように収集・整理・使用するか、それは研究方法と研究計画の練り上げることにおいて最も重要な問題である。

しかし、実は「上山下郷運動」の時、「知青」たちは農村と辺境の生活の中で大量の書簡、日記を書いていた。それらの文字は、後に現れた「知青回顧録」と同様に「知青」の日常生活の記録である。「知青回顧録」よりも、「知青書簡・日記」の方が「知青個人史・生活史」を研究する最初の資料に適しているかもしれない。そのゆえに、マクロな歴史に対する補足として、書簡の史料価値がここに現れた。そのため、「知青書簡」が資料として「知青個人史・生活史」の研究に利用できれば、より立体的な研究結果が得られると思う。

ここ10年間の「知青研究」はすでに「下郷生活」に関わった多くの細部に深く入り込んでいて、例えば「知識青年」の「生産－生活－生存」という三角関係、人間関係、生活費、帰郷してからの再就職、余暇の学習、結婚などを検討している。復旦大学発展研究院の魏瀾氏と張楽天氏が2021年に発表した文章「家庭本位の『関係』実践：私的書簡の家庭主義画像（1972-1995年）」は、ある「知青夫婦」の23年間にわたる書簡を研究主体として行ったものであり、革新的で意義が深い。著者は手紙の分析を通じて、この「知青夫婦」の視点における歴史の異なる側面を読者に示し、マクロの歴史叙述を補足した。

しかし、「知青書簡」の総数は膨大であっても、その大部分は民間に散らばっていたり、欠巻であったりして、その分類、整理、解読が難しい。例えば魏瀾氏の論文に使われている資料が「復旦大学現代中国生活資料研究センター」に由来しており、未公開の一次資料である。中には数年分（1986－1994年）の手紙の欠落もあるが、同センターの他の資料より、その完全度が非常に高く、極めて稀有で貴重な資料である。したかつて、すでに整理されて出版されている「知青書簡集」は、研究者の注目に値する。

## II. 「知識青年」の書簡について

筆者は2018年から、中国の「知識青年」の「個人記憶」に関する研究を始めた。2018年から2019年にかけて、元「知青」である作家、芸術家、また他分野の社会的有名人数十人に対して、口述を通じて彼らの「下郷」時の記憶、80年代に都市に帰ってからの思いの変化を取材した。「情熱」から「絶望」に、そして「反

省」から「受け入れる」まで、彼らの経験と考え方を筆者に伝えた。つぎに2019年以降、第I節で述べたように、より多くの研究資料を得るため、筆者の研究対象は「知青」中の有名人から「無名の知青」に着目し、研究方法もオーラルヒストリーから、「知青書簡」のテキスト分析に移り、同時に「知青書簡」の蒐集・解説・分析を開始した。

筆者が用いた研究資料は主に『一個上海知青的223封家書』（一名の上海知青の223通の家書）<sup>23</sup>という「知青書簡集」である。2009年に上海社会科学院によって出版されたこの書簡集には、陸融という「上海知青」が「雲南生産建設兵団（以下「兵団」と略す）」に「下郷」の8年間、家族宛ての223通の書簡が収録されている。（以下「陸融書簡」と略す）

筆者はこの書簡集における「知青」の「上山下郷運動」期間の「心身の状態」に着目している。すなわち、「知青个体」の生活の細部と「上山下郷運動」との関係进行分析することで、マクロな歴史記録の中の不明瞭、不完全な内容を補うことができると思う。

研究方法として、現代中国語書簡に関する一部の先行研究の中で、文化史と「テキスト発生」<sup>24</sup>に関する方法論に基づく、「陸融書簡」に対してテキスト分析を行った。目的性を捨てた上で書簡の中の事件について考えることは、特別な記録よりも、日常のことで「知青个体」のある特定の思考パターンを発見することが重要である。これらの繰り返し発生する特定のパターンには、「知青个体（陸融）」の認識、想像、論理判断などの要素が含まれているからだ。だからテキストを分析する際には、陸融が何を書いたのかだけでなく、なぜ彼がこのように書いたのか、彼がどのように（どのような場合に）書いたのかを常に考えなければならない。陸融を研究対象として具体的な時空間の中に置くべきであり、書簡に出てくると様々な生活シーンとともに考え、議論を展開していく。

### ・陸融と「陸融書簡」

ここでは、陸融と「陸融書簡」を紹介し、陸融という「知青」のアイデンティティ、および彼が「上山下郷運動」の時に書いた書簡の内容について考察しておきたい。

まず、「陸融とは誰か」、という問題に答えなければならない。これに関して、「陸融書簡」においては彼の出身まで詳細に記録しなかったが、内容から推論すると、彼は上海における一般労働者階級に生まれ、また祖母、父、母、兄、弟と

23 陸融著、沈志明注『一名の上海知青の223通の家書』上海：上海社会科学出版社、2009年。

24 「テキスト発生（フランス語：Génétiq ue des textes）」はフランス学者のPierre-Marc de Biasiが提案した文学文献（または他の著作）を分析する方法である。

合わせて6人家族だと推測できる。1969年、陸融は上海の中学校を卒業し、そして1970年5月に「兵団」第一師第四連隊（オリーブダム農場）<sup>25</sup>に「下郷」した。書簡もその時から書き始めたものである。

次に、「陸融書簡」においては何が書かれか。「上山下郷運動」の時、農場は半軍事化管理の体制に置かれたため、「知青」としての陸融の日常生活習慣が非常に規則的だと言える。「下郷」初期、陸融の行動は基本的に他の「知青」と同じく、朝7:00-9:00は政治学習で、9:00-12:00は農場労働に参加し、12:00-15:00は休憩時間、15:00-18:00は午後労働時間だった。そして夜は広場で映画などの文芸活動、また毎週何回も行われた政治会議、および不定期の「知青集会」がある。陸融の初期（1970年-1972年）の書簡においては、労働時間、労働内容、収入レベル、食事、農場の自然環境、宿泊条件、他民族の文化、人間関係、政治事件が「知青個体」に与えた影響など、「下郷」生活の隅々まで細かく描かれた。それはこれまでの通史文献において、未だはっきりしなかった当時の具体的な生活状況である。そして「知青生涯」の中期（1972年—1976年）になると、農場生活の新鮮さが減退し始めた。初期のように詳らかに記録されている生活・生産の内容に替えて、「大学の進学」、「転勤」、「結婚」、「帰城」などの内容が徐々に増えていく。これは、マクロな歴史研究の中で「上山下郷運動」の時によく語られた社会的問題に合致し、統計データを根拠にするマクロ研究に比べ、陸融の個人的な視点からも、これまでの問題点を異なる視点から再理解できるであろう。

一例を挙げると、1973年の全国大学入試試験の前後、陸融はこれまで以上に書簡を頻繁に書いている。それは、上海に暮らしている両親から試験の最新情報を得たいかもしれないが、一番の理由として、彼はその間に起きた激しい感情、すなわち彼の悩みと考えを親に伝えたい。

私にとって悩みなのは、中卒の文化程度とはいえ、実際に学んだ知識は小学校卒業だけで、今の小学校卒業生のレベルや要求には及ばないかもしれないということです。中学生の時、少しも学んでいない。数学で言えば、簡単な一元一次方程式は、先生は教えたことはありませんでした<sup>26</sup>。

「（幹部の任命）通知」が来たら、すぐに着任に行きます。今はそのことを考えていますが、断ると印象が悪くなります。最も主要な問題は、今なぜみんな（連隊の）幹部になりたくないのか、特にここでは、待遇は普通の人と同

25 現在の雲南省景洪市に位置する。

26 陸融書簡 1973年5月31日付。

じで、「お金をあまり取らず、仕事をたくさんする」という思想が存在しており、私（知青）たちは、みんな早くここを出たいと思っている<sup>27</sup>。

時々考えてみて、もし私が1967年の中学卒業生だったら、合格できるかもしれない。今は時間が近くて、今月25日の試験まで数日しかありませんが、まだ十分に復習するほどではない<sup>28</sup>。（筆者翻訳）

以上は、1973年7月の大学入試の前に陸融が父に送った書簡の一部である。彼は「知識青年」としての自覚を持つことで自身の生活にある種の価値を与える一方、自らをある種の道徳的プレッシャーに直面させた。具体的には、陸融の悩みは物質的なものとも関わるし、精神的な欲求とも関わる。政治・経済的圧迫もあれば、理想が実現できないことによる不満もある。

1973年8月の大学募集結果が発表された後、再び（1971年に初参加したが、当時は選挙推薦制であるため、不合格となった）落第し、その遺憾と悔しさを次のように記している。

（前略）残念ながら、今度はまた落第しました。どういうわけか分かりません。採用基準もわからない。採用された5人のうち、3人の「老上海」<sup>29</sup>はすべて党员で、明らかに政治的条件が良い。2人の「新上海」<sup>30</sup>、政治的条件について、私は彼らと同じ、勉強について、彼らより良いと言うことができます<sup>31</sup>。

（前略）仕方がない、（推挙）権力は中隊長の手にあるから。ここ数日、私はとても不快で、以前は進学に対する態度が比較的積極的に積極にもかかわらず、このような実際の状況に直面して、いろいろ悪い気持ちが出てきた。

（中略）

もちろん自分のせいにもしなければならぬし、人間関係の重要性を考えていないので、今は不愉快になっている。

（中略）

何度言っても、やはり自分が運が悪いせいで、考えてみると2回もチャンスがあって、成功していないので、後で言うことはありません<sup>32</sup>。（筆者翻訳）

---

27 陸融書簡 1973年6月19日付。

28 陸融書簡 1973年7月16日付。

29 老上海（ろうしゃんはい）、1968年以前（「文革」勃発前も含む）「下郷」の「上海知青」。

30 新上海（しんしゃんはい）、1968年以降「下郷」の「上海知青」。

31 陸融書簡 1973年8月27日付。

32 陸融書簡 1973年9月13日付。



1973年の大学入試試験に関して、その他の「知青回顧録」やインタビューの記述も少なくなかった。しかし、陸融の書簡には、運命の不公平さに対する不満、それを発散しようとしてもできない気持ち、また最後には自分でそれを解消するしかない苦い味がはっきりと感じられる。

また、手紙を読む人に心配させ、不安感、焦燥感などのマイナス的な感情を与えないように、陸融は事前に内容と用語を配慮し、最も穏やかな口調で記録するよう努めたと思う。手紙を書くことによって陸融はまず自分自身を聞き手とし、それは自分自身を説得する、治療するプロセスでもある。このような家族と交流し合い、価値観をめぐる議論と問いかけを行ってきたことから見ると、手紙は陸融の自己反省の重要な手段となった。こうした表現、対話、反省の反復の中で、彼はある理想的な「知識青年像」をもち、自己形成のプロセスを示している。

このように主体性と客体性が混在しているテキストは、史料として陸融の活動と思想を示している他方、それもまた陸融の自己対話、すなわち「歴史の現在と過去の対話」<sup>33</sup>の過程である。「陸融書簡」を解読することは、彼のような「知青」がいかにか「上山下郷」という現実と向き合い、生きていたのかを明らかにすることである。そのような陸融は、時には現実から逃げる、時には現実を受ける、時には未来を待つ、という三つのパターンを示した。

### Ⅲ. 筆者の「知青書簡」収集意義

筆者は「陸融書簡」を繰り返し読むうちに、陸融が書簡のテキストの外で伝えたいメッセージを感じてきた。どんな理由であれ、言いたいことが陸融によって手紙に書かれていないことは、後の研究者が自ら推論してこそ理解できる。また、このような「推論された情報」はテキスト情報よりも少ないわけではないようだ。

「知青研究」の歴史において、「陸融書簡」という明確な出所があり、比較的完全に保存されている書簡資料は非常に珍しい<sup>34</sup>。しかし、1,400万人の「知識青年」の総数を見ると、「陸融書簡」のような質の高い資料の公開は少なすぎるといえるだろう。

実際、「知青書簡」の資料の数は非常に膨大で、多すぎるとも言える。いま、中国の学界が直面している問題は資料の収集ではなく、既存の資料をどのように整理し、十分に使用するかにある<sup>35</sup>。そこで、以前の研究経験と結びつけて、「知

33 E・H・カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』東京：岩波書店、1962年。

34 金大陸『一名の上海知青の223通の家書・序言』上海：上海社会科学出版社、2009年。

35 戴建兵、張志永「個人生活史：現代中国史研究の重要な成長点」『河北学刊』2015年第35巻第1号、68-72頁。

青書簡」の資料の整理と使用の問題を解決するために、筆者は自ら「知青書簡」の収集を展開した。

### 1. 「知青書簡」の収集の現状

2021年以前、中国ではほとんど公式組織や学術機関が「知識青年」の書簡・日記を大規模に蒐集することがなかったが、民間には個人的なコレクションが少なくない。一部の「文革物品」の収集家は「知青」の書簡・日記・ノートなど資料を貴重な文物と見なし、80年代初期からすでに意識的に「知青書簡」を収集している人もいる。しかし、多くの人が気にしているのは「知青書簡」の文化財的価値であり、それを商品として取引している。そのため、有名な「知青作家」や「知青芸術家」などの書簡と日記をコレクションとして好まれると同時に、無名の「一般人」の書簡も同じ理由で紛失しやすいことになる（多くの文物商人はまず回収された古紙の中から「文化財価値」のあるものを選び、選ばれなかったものは再び捨てられる）。

筆者の成都にいる友人、「文革文物」の収集家のY氏は90年代半ばから「文革」時代の個人用品の収集に集中してきた。ここ2年間、彼のコレクションから約18,000通の書簡と300冊の日記が整理された。資料の時間帯は1950年代から1990年代にかけて、地域分布は主に中国の南西部、すなわち四川省、雲南省、貴州省、一部のチベットと新疆地区に集中している。しかし、時間が限られており、資料の総数が膨大であったため、筆者は当時、細かい整理をすることができず、大雑把にその中から約200通の書簡を読み、簡単なノートをメモした。

「上海知青研究会」の金光耀、金大陸教授は「Y氏が保有している書簡・日記資料に関して、現在このような数量と品質（主にセットになった資料を指す）の一次資料は中国においてもかなり珍しい」と言った。この規模はすでに多くの大学図書館の所蔵量を超えており、中国の社会史と個人史研究に大きな影響を与えるだろう。これに伴い、筆者の紹介で、「知青研究会」はこの資料の整理、入力、保存をし始め、このノートが完成した時点で、上海側はすでに成都に人を派遣して具体的な仕事を始めた。

### 2. 「書簡資料」の「掛け替えない性質」

一部の学者は「書簡、日記などの個人的な記録が資料のイメージ性をよく維持しているが、言いにくいことを回避するために、その史料の真实性と客観性を低下させている」と指摘した<sup>36</sup>。この観点はマクロ歴史学の枠組みにとって非常に正

36 戴建兵、張志永「個人生活史：現代中国史研究の重要な成長点」『河北学刊』2015年第35巻第1号、68-72頁。

しい。しかし、筆者から見れば、「知青個人史・生活史」に対して、これらの資料の中のすべての粉飾、嘘などの客観的事実に反する記録が、「知青」の心を知る有効な道だろう。

2022年1月、Yさんに会った時、ある資料は印象強く残っていた。手紙を書く人のZ氏、貴陽市K県で「知青教師」をしていた。今回収集されたのは1976年1月から1977年7月までの27通の書簡である。普通の「知青回顧録」に書かれているように、彼もよく手紙の中で農村生活の苦勞と運命への迷いを描いている。しかし異なるのは、農村の子供達との交流において話すたびに、明白に暖かさを表していることである。時々書簡の中に学生からの絵は1、2枚が挟まれ(27通の書簡の中で全部を合わせ、計8枚の絵がある)、すべてクレヨンで着色し、今日見ても依然として鮮やかである。描いた内容は主に農村生活のシーンで、とても生き生きとしている。これは今まで読んだ資料では経験したことのない感情であり、テキスト情報では伝えられない。

このことから見ると、書簡・日記のような手書きの原本資料の中には、テキストのほか、筆跡、添削跡、汚れ、イラスト、付加物などから、後の研究者に「知青个体」に関する情報を提供することができる。そして、手紙の折り畳み方、保存の仕方、紙のにおいなども研究者の連想を引き起こすことができ、「知識青年」が書く時の気持ち、受信者との親密度、重要度などを推測することができる。「陸融書簡」の研究経験を加え、筆者は書簡資料、特に手書きの原本が「知青個人史・生活史」の研究において掛け替ええないの性質を信じる。

## おわりに

自分の研究経験を通じて、筆者は現在の「知青個人史・生活史」に関する研究資料の不足を意識した。この「不足」とは、資料の数の不足ではなく、いま既存の資料が研究に十分に利用されていないことを指す。客観的に言えば、「知青書簡・日記」の収集と整理は確かに困難な過程であり、特に一次資料の解読やテキスト抽出には時間がかかる。例えば、書簡の原稿を読むには、筆跡、汚れ、便箋の破損などの妨害から、テキスト情報の読み取りプロセスは非常に遅い。

しかし何よりも、筆者は「知青書簡」のテキスト情報以外の価値を見直すべきだと考えている。総じて、「知青書簡」はテキストの内容以外にも発見されていない情報が多いと思う。既存の資料について、テキストの外側に隠された情報の発掘は、新しい資料を収集することよりも重要になるだろう。

筆者は一部の先行研究所が指摘した、「書簡・日記の著者の主観的な意志のため、

資料の真実性に疑問が残る」<sup>37</sup> という観点を否定しない。しかし、このような主観的な感情によって、資料のテキスト以外の情報を与えているのである。もちろん、これらの情報が「知青個人史・生活史」の研究に利用できるかどうか、ひとまず、筆者自身が提案した仮説にすぎず、それを検証するには、原資料の収集と解読に引き続き参加しなければならない。

#### 参考文献

英語文献：

Thomas P. Bernstein, *Up to the Mountains and Down to the Villages — The Transfer of Youth from Urban to Rural China*, New Haven and London: Yale University Press, 1977.

日本語文献：

E・H・カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』東京：岩波書店、1962年。

松村志乃「王安憶論——『新时期』を生きる『小説家』の精神史として」2013年。

大野旭「広潤天地へ飛ばされた知識青年たち—中国・文化大革命期における人的流動と社会主義権力の表象」『中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策』の成果と課題』2010年、ページ89－96。

中国語文献：

戴建兵、張志永「個人生活史：現代中国史研究の重要な成長点」『河北学刊』2015年第35巻第1号。

定宜莊「中国知青史：初瀾（1953－1968）」北京：当代中国出版社、2008年。

定宜莊「知青集団編纂回顧録の特徴と発展過程」『中共党史研究』2018年第9期、50-54頁。

金大陸、金光耀「中国知青研究的歴史学転軌（2008-2018）」『史林』2019年第5期、200-221頁。

金光耀「後知青時代の知青歴史書写」『中共党史研究』2015年第4期、117-121頁。

梁麗芳「記憶の上山下郷—知青回顧録の分類、貢献及びその他について」『現代文壇』2008年第1期、25－29頁。

梁麗芳「私的経歴と集団記憶：知青世代の文化ショックと歴史アイロニー」『海南師範学院学报：社会科学版』2006年第4期、20-26頁。

劉小萌、定宜莊『中国知青事典』成都：四川人民出版社、1995年。

陸融著、沈志明注『一名の上海知青の223通の家書』上海：上海社会科学出版社、2009年。

Michel Bonnin、欧陽因訳『失われた世代：中国の「上山下郷」運動（1968-1980）』中国大百科事典出版社、2010年。

Pierre-Marc de Biasi 著、汪秀華訳『文本発生学』天津：天津人民出版社、2005年。

邱新睦「『知識青年上山下郷』研究総説」『現代中国研究（Modern Chinese Studies）』2003年第4期。

魏瀾、張樂天「家庭本位の『関係』実践：個人書簡における家庭主義画像（1972-1995年）」『社会』2021年第2期、27－55頁。

張凱、紀元『又説“老三届”』北京：中国青年出版社、1997年。

---

37 同前。

**Abstract:**

## A Further Study on the “Sent-down Youth’s Private Letters” -focusing on the personal history and life history of Sent-down youth-

You YOU

Since the 1990s, the creation of individual memoirs and personal biographies has become popular in Mainland of China. Due to this trend, the study on “Sent-down Youth”<sup>1</sup> began to transform and extend towards personalization and privatization. Many scholars advocated defining this period as a new stage of “Sent-down Youth” study - “Private Writing”. Sent-down Youth’s memoirs and audio autobiographies were included at this stage as the main research materials. The personal history of Sent-down Youth also began to appear in the historical framework as a new topic.

By the end of the 1990s, the number of Sent-down Youth’s memoirs was too large to be counted (including both published and unpublished). With such an extremely large amount of data, researchers gradually realized the limitations of memoirs for studying personal histories and life histories. Therefore, finding new research materials has become another research core. The need for new materials should solve the problem of simplifying and subjectivizing the research results brought by similar literary descriptions in memoirs or oral history. For this purpose, letters and diaries began to receive increasing attention as another form of private writing.

By the 1950s, private letters had become the most important method of information exchange for ordinary Chinese people. In particular, the Educated Youth, who participated in the “Movement of Going Up to the Mountains and Down to the Countryside”, wrote a large number of personal letters during their sent-down career.

In recent years, many research results based on the letters of the Sent-down Youth have been published. These provided the personal history of Educated

---

1 Sent-down Youth: also known as “Educated Youth” (Zhi Qing).

Youth with many details of their daily life, such as production, study, marriage, changing jobs, returning to the city, and so on.

However, it was very difficult and time-consuming to collect and sort out the original letters. Additionally, due to the loss and damage of some original materials, many of the collected information is fragmented. On the other hand, some people thought that the Educated Youth had a strong subjective consciousness when writing these letters or diaries, therefore they can whitewash and cover up some objective facts. As a result, some scholars doubted the authenticity and objectivity of the letter materials.

This article is an in-depth review based on this doubt. The suspicions of the early scholars are correct and well-founded. The strong subjective feelings of the Educated Youth will indeed affect the objectivity and fairness of historical research. However, this article believes that if the research framework is narrowed down to the category of the personal history of Educated Youth, their subjective consciousness based on some reasons is an effective way to understand their real opinions. This is only a hypothesis of this research. As to whether it is feasible, more cases of interpretation of the original letter materials, as well as research and discussion are needed. Meanwhile, it is also necessary to reinterpret the existing research information from a new perspective.

Keywords:

Sent-down youth, personal history, individual memoirs, private letters